

〔論文〕

アウグスティヌスにおける「喪の作業」

文 禎 顕

名古屋学院大学経済学部

要 旨

本研究は、古代キリスト教教父アウグスティヌス（A.D. 354-430）の死生観に関するものとして、とくに、古代自伝文学の最高傑作として知られている彼の著作『告白録』第9巻を取り上げ、そこに表れている彼の悲嘆経験と「喪の作業」について論じることを目的とする。これを読む現代人は、死別による悲しみを強い精神的力で抑制する彼の姿を、不自然で人為的な冷たさとして捉えるかもしれない。しかしながら、彼の悲嘆や「喪の作業」は、実は母の死に対する悲しみとその親子の絆を永生の希望という形として昇華させようとするものである。彼の「喪の作業」におけるそのような強い意志が、修辞学的技法を駆使した文学作品として『告白録』を仕上げ、現代的グリーフケアの参考になる素材と意義を提供していると考えられる。

キーワード：アウグスティヌス、告白録、悲嘆、喪の作業、グリーフケア

Grief work in Augustine

Jungho MOON

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

※本研究は公益財団法人大幸財団の平成30年度「第7回人文・社会科学系学術研究助成」によるものである。

発行日 2020年3月31日

1. はじめに

本研究は、古代キリスト教最大の教父アウグスティヌス（A.D. 354-430）の死生観に関するものである。とくに、古代自伝文学の最高傑作で彼の代表作の一つである『告白録』を取り上げ、彼の「喪の作業」（喪の仕事¹⁾）の構造について論じることとする。『告白録』の真のクライマックスとされる第9巻²⁾に描写されているアウグスティヌスの悲嘆記述において現代のわれわれに不自然な印象を与えるのは、当時キリスト教世界の信仰的慣習にしたがって自分の母の死に対して素直に悲しみの感情を表現することをよくない行いとみなし、極度に慎む場面であろう。それは現代人の目からすると、人間らしさを欠いた非人格化を促すようなこととして見られるかもしれない。実際従来の研究においてもそのような指摘が出されている。例えば O'Meara は、第9巻における悲嘆抑制の行為をさせてアウグスティヌスが禁欲主義の未熟な初心者として自身の心を堅くしてしまったこと、そこに彼の弱さ（weakness）と無関心（冷淡さ indifference）が非常に冷酷に表れていると読み取っている³⁾。O'Connell は悲嘆記述においてアウグスティヌスと母モニ

-
- 1) フロイト著「喪とメランコリー」(Trauer und Melancholie)『フロイト全集14』(新宮一茂外4人訳)、岩波書店、2010、273-276頁。喪の仕事 (Trauerarbeit) というのは、このフロイトのこの論文の中に最初に表れるといわれる。これは日本語では「悲嘆の仕事」、「悲嘆の作業」、「悲哀の仕事」、英語ではグリーフワーク (grief work) などと訳される。フロイトはメランコリーの本質を喪と比較しながら説明するという研究目的でこの論文を書いている。その議論の中で、喪は、愛する人との死別に対する反応だけでなく、愛する祖国や自由や理想などの抽象物の喪失に対する反応でもあるという。喪には正常な生活態度からのなほだしい逸脱が伴われるが、一定の時間が経ると克服される。そして、喪が実行する作業（喪の仕事）は、次のような過程から成り立つ。①愛する対象がもはや現存しないため、この対象との結びつきからすべてのリビド（欲動）を回収するという心理がはたらく。②それに対して反逆が起きるが、その反逆が非常に徹底し、現実からの背反と対象への固執とを全うすることもある。通常は現実に対する尊重が勝利を保つ。③現実による指図は多大なエネルギーの消耗とともに一つ一つ遂行され、その間に失われた対象の存在は心的に維持される。この現実の命令をもれなく遂行するという妥協の実行は途方もない苦痛を伴う。④ついに再び自由で抑止を免れた状態に戻ることによって喪の仕事が完了する。

島蘭進氏は「喪」は死者を悼み、その気持ちを形にして表し、自らの行為をつつしむことを意味する。…「喪」というのが外的な形にとどまらず、内面、つまり心の内側でも何かを行っている」こととして「喪の仕事」を理解する（島蘭進、『ともに悲嘆を生きる—グリーフケアの歴史と文化』、朝日新聞出版、2019、）。小此木啓吾氏は喪の仕事を「失った対象への断ちがたい思慕の情に心を奪われ、怨み、憎しみ、つぐないの心が錯綜する。…これらの反応を一つ一つ体験し、解決していく自然な心の営みのこと」と定義する（小此木啓吾『対象喪失』、中央公論社、1994、まえがき i 頁）。

- 2) Kim Paffenroth and Robert P.Kennedy, *A Reader's Companion to Augustine's Confessions*, Westminster John Knox, 2003, p.152. 第8巻の回心が最も難しく最も重要な段階ではあるが、クライマックスではないという。
- 3) J. J. O'Meara, *The young Augustine: the growth of St. Augustine's mind up to his conversion* (2nd rev.ed), New York: Alba House, 2001, p.210.

カは、永遠を信じる信仰の世界においては人類に原罪を受け継がせた最初の人間であるアダムとエバの息子と娘、信仰の遍歴の旅を共にする仲間、天国の同じ市民という不自然な関係になり、この世の親子関係でない別の次元の関係性が彼らの真のアイデンティティであると指摘する。そしてそこに表れるアウグスティヌスの人間論は恐ろしいほど思索的(theoretical)である⁴⁾という。このように見方によっては、彼の悲嘆行為は人間味のない冷淡なものとして見られることは否定できない。そして、そういう冷淡さが、G. ゴーラーが主張するプロテスタント伝統の国々で見られる社会的な冷淡さ、つまり、死に対する不合理的な熱中（「死のポルノグラフィ」）、死に対する不合理的な怖れ、「バンダリズム」（あらゆる悲哀に含まれている怒りによる他者への暴力）といった社会的諸現象を生み出す「哀悼に対する社会的承認の消失」⁵⁾（社会的な拒絶）が、もしかするとアウグスティヌスの冷淡さから来るものではないか、と疑う人もいるであろう。しかし、悲嘆の作業（喪の作業）における彼の冷淡さは、実は母の死に対する悲しみと親子の絆を永生の希望という形へ昇華させられたものとして見ることも可能ではなかろうか。本研究ではこの点に焦点を合わせつつ、母モニカの死による彼の喪の作業を分析し、それを通して現代的な意義を述べることにする。

2. キケロの修辞学を応用するアウグスティヌス

アウグスティヌスの悲嘆経験を分析する際、アウグスティヌスが応用したキケロの修辞学（弁論術）の技法を手掛かりにする。アウグスティヌスは著書『キリスト教の教え⁶⁾』（*De Doctrina Christiana*）（427年か428年頃）で聖書を教える教会の雄弁家たちが正しく聖書を解釈し、キリスト教の真理を分かりやすく、魅力的に、力強い雄弁で語る方法を示すために、キケロの修辞学を積極的に用いている。特に同書第4巻においてリベラルアーツ⁷⁾（自由七科）の修辞学的伝統が高く評価され、キリスト教的発展の根拠が表れると知られている⁸⁾。

4) R. J. O'Connell, *St. Augustine's Confessions: the Odyssey of soul* (2nd ed.), New York: Fordham University Press, 1989, p.119.

5) G. ゴーラー著・宇都宮輝夫訳『死と悲しみの社会学』、ヨルダン社、1986、174-182頁。

6) 加藤武訳「キリスト教の教え」『アウグスティヌス著作集（6）』、教文館、2011、はしがきの1-2頁。第1巻から第3巻の23章35節までは396年から397年4月の間に、第3巻の残りと第4巻は427年か428年頃に書かれた。

7) アウグスティヌスはカシキアムで自分の弟子たちの教育のためにヴァロー（Terntius Varro, B.C. 116-27年）のリベラルアーツ（自由七科）をテキストとして使ったと言われる（P. Brown, *Augustine of Hippo: a biography* (A new ed. with an epilogue), London: Faber and Faber, 2000, p. 115.）。『秩序』(II.12.35, II.20.54) にヴァローに関する言及があることから、アウグスティヌスの自由七科への理解は決定的にヴァローに影響されたものとみなされる。（A. Fitzgerald (ed.), *Augustine through the Ages: An Encyclopedia*, Grand Rapids: William B. Eerdmans Pub., 1999, pp. 492-493.）。

8) Bruce A. Kimball, *Orators & Philosophers: A History of the Idea of Liberal Education*, New York: Teachers College Press, 1986, pp. 41-42.

2.1. キケロの修辞学的技法【三つの文体】

アウグスティヌスが『キリスト教の教え』第4巻で紹介するキケロの修辞学的技法は、キケロの著作の中に次のように記されている。

キケロ①「ゆえにわれわれが求める雄弁家は一著者アントニウスの提案にしたがってこのような人を探すが一、法廷や公の訴訟において証明する (probo) ために、魅了する (delecto) ために、説得する (flecto) ために、このように語る者であろう。証明することは必要性のためであり、魅了することは快さのためであり、説得することは勝利のためである⁹⁾。」

キケロ②「ゆえに同じことを繰り返すが、小さなことを平淡体の文体で (parva summisce), 普通のことを中庸体の文体で (modica temperate), 大きいことを荘重体の文体で (magna graviter) 語ることができる者が雄弁家であろう¹⁰⁾。」

キケロ③「しかし、雄弁家の職務が多い分、語り方の種類も多い。証明するにおいては繊細な語り方 (subtile) が、魅了するにおいては中庸の語り方 (modicum) が、説得するにおいては情熱的な語り方 (vehemens) が挙げられる。その一つの中に雄弁家のすべての力があるのである¹¹⁾。」

2.2. アウグスティヌスにおけるキケロ修辞学的技法の応用¹²⁾

上記のキケロの修辞学的技法をアウグスティヌスが『キリスト教の教え』第4巻で次のように応用していると考えられる。

- a. キケロ①に該当する箇所。「したがってある雄弁家は言った。雄弁家は教える (doceo) ために、魅了する (delecto) ために、説得する (flecto) ためにそのように語らねばならないと彼は真実なことを語った。それから彼は付け加えた。教えることは必要なことであり、魅了することは甘美なことであり、説得することは勝利である¹³⁾。」(キケロにおいて「証明する」(probo)

9) Cicero, *Orator* 21.69 “Erit igitur eloquens-hunc enim auctore Antonio quaerimus-is qui in foro causisque civilibus ita dicet, ut probet, ut delectet, ut flectat. Probare necessitatis est, delectare suavitatis, flectere victoriae;” (*Orator* (46 BC) の原文は Harvard University Press (The Loeb classical library, 1952) から出版されたもの。)

10) Cicero, *Orator* 29.101 “Is erit igitur eloquens, ut idem illud iteremus, qui poterit parva summisce, modica temperate, magna graviter dicere.”

11) Cicero, *Orator* 21.69 “Sed quot officia oratoris, tot sunt genera dicendi: subtile in probando, modicum in delectando, vehemens in flectendo; in quo uno vis omnis oratoris est.”

12) 本研究で引用する『キリスト教の教え』のテキストは特に下記の加藤武訳にたよって私訳を試みたが、参考にした原文及び翻訳は次の通りである。原文: *De Doctrina Christiana* (396/427, CSEL (LXXX))。英訳: ‘On Christian doctrine’ (tr. J. F. Shaw, “Great books of the Western World” (18), *Encyclopædia Britannica*, 1952.); “Augustine *De Doctrina Christiana*” (ed., tr. R. P. H. Green, Oxford University Press, 2004.)。和訳: 『キリスト教の教え』(加藤武訳『アウグスティヌス著作集 (6)』, 教文館, 2011)。

13) *De Doctrina Christiana* 4.12.27 “Dixit ergo quidam eloquens, et verum dixit, ita dicere debere eloquentem ut doceat, ut delectet, ut flectat. Deinde addidit: *Docere necessitatis est, delectare suavitatis, flectere*

は、アウグスティヌスにおいては「教える」(doceo)に代わっている。)

- b. キケロ②に該当する箇所。「それゆえ、小さい事柄を平淡体で、中間の事柄を中庸体で、大きい事柄を荘重体で語ることができるという人は雄弁家であろう¹⁴⁾。
- c. キケロ③に該当する箇所。「それゆえ、小さい事柄を平淡体で教え、中間の事柄を中庸体で魅了し、大きい事柄を荘重体で説得するように語る人は雄弁家であろう¹⁵⁾。」

キケロの修辞学的な技法とそれを引用したアウグスティヌスの著作において語られる修辞学的技法は次のようにまとめられる。

【キケロの修辞学的技法】

- ① (法廷の雄弁家にとって) 証明する (probare) ことは必要なこと (necessitatis) として繊細で抑えられた文体 (平淡体) (summisce, subtile) で語られるべきである。小事 (parva) の場合も同様である。
- ② 魅了する (delectare) ことは快いこと (suavitatis) として穏やかな文体 (中庸体) (temperate) で語られるべきである。これは中事 (modica) の場合も同様である。
- ③ 説得すること (flectere) は勝利 (victoriae) に導くこととして力強く熱烈な文体 (荘重体) (graviter, vehemens) で語られるべきである。これは大事¹⁶⁾ (magna) の場合も同様である。

【アウグスティヌスの応用した修辞学的技法】

- ① (教会の雄弁家 (聖職者) にとって) 教える (doceo) ことは必要なこと (necessitatis) として繊細で抑えられた文体 (平淡体) (summisce) で語られるべきである。小事 (parva) の場合もこの文体で語る。
- ② 魅了する (delectare) ことは快いこと (suavitatis) として適度な文体 (中庸体) (temperate) で語られるべきである。中事 (modica) の場合もこの文体で語る。
- ③ 説得すること (flectere) は勝利 (victoriae) に導くこととして力強い文体 (荘重体) (granditer) で語られるべきである。大事 (magna) の場合もこの文体で語る。

キケロの文章とそれを引用したアウグスティヌスの文章とでは①の「証明する」(probare)と「教える」(docere)の違い以外に、①から③までほとんど同様であることがわかる。①「証明する」

victoriae.”

14) *De Doctrina Christiana* 4.17.34 “Is erit igitur eloquens, qui poterit parva summisce, modica temperate, magna granditer dicere,”

15) *De Doctrina Christiana* 4.17.34 “Is erit igitur eloquens, qui ut doceat poterit parva summisce, ut delectet modica temperate, ut flectat magna granditer dicere.”

16) アウグスティヌスによると、キケロの場合、小事、中事、大事は次のような例が挙げられるという。金銭トラブルによる法律問題のような小さな事柄は平淡体で教え、人の命や自由に関わる問題のような大きい事柄は荘重体で説得する。そして、小さな事柄と大きな事柄にも属さず判決するような問題でなくただ聞き手を楽しませようとする法律問題は中庸体で魅了する、ということである (4.17.34, 4.18.35)。

と「教える」の相違点は、おそらくキケロにおいて雄弁家というのは法廷で「証明する」ことを仕事とする法廷弁論家（政治家）であるのに対して、アウグスティヌスにおいて雄弁家は教会で聖書を「教える」教会の雄弁家（聖職者）だということであろう。

ここで、三つの文体（平淡体、中庸体、莊重体）と各文体のそれぞれの目標（教える、魅了する、説得する）といった修辞学的技法が明らかになる。アウグスティヌスは、キケロから学んだ修辞学的技法を自由に応用することで教会の雄弁家が聖書解釈から得た基督教の真理をより効果的に伝えられる方法を次のように具体的に論じる。

- ①「教える」ことを目標とする平淡体においては聞く側がそれを理解するように、意味が不明な事柄を明らかにし、言葉の装飾はせず様々な問題の結び目をほどこように論証し、場合によっては敵の誤りに対して確信をもって正しく教える（4.12.27, 4.13.29, 4.20.39, 4.21.46, 4.26.56）。
- ②「魅了する」ことを目標とする中庸体においては語る側が言葉の装飾を通して穏やかに甘美に語ることによって聞く側がその話に注意し耳を傾け一緒に悲しみ、恐れ、悦び、心が動かされるようにしなければならない（4.12.27, 4.13.29, 4.20.40, 4.21.48）。
- ③「説得する」ことを目標とする莊重体において言葉の装飾が欠けるとしてもしなければならないことをしようと欲しない聞く側が頑なな気持ちを曲げて正しい行動に移すように魂の激しい感情をもって力強く語らなければならない（4.12.27, 4.13.29, 4.19.38, 4.20.42, 4.24.54）。
- ④話の全体は優位的な文体によって統一が保たれるべきであるが、三つの文体を調和の中で併用することによって変化をもたらすべきである。このような併用の中でも、聞き手が「教える」ことによって理解され、「魅了する」ことによって喜んで聞き、「説得する」ことによって従順に従うという三つの目標が三つの文体それぞれの中にも含まれるように教会の雄弁家は努力すべきである（4.22.51, 4.26.56, 4.26.57, 4.26.58）。

ところが、体系を恐れ非構造化することを一つの特徴とするキケロの修辞学を参考にしたアウグスティヌスの『基督教の教え』第4巻は、その非構造化の極点として知られており、その中に基督教の説教者（雄弁家）は用語より真理に専心し、ただ明晰で語ればいいだけで、雄弁に対する規則が何もない、という見解もある¹⁷⁾。つまりキケロの修辞学の非構造化をアウグスティヌスはさらに進めたということであろう。本研究ではアウグスティヌスが応用したキケロの修辞学的技法の一部をさらに非構造化して、『告白録』のアウグスティヌスの悲嘆記事に応用することを試みたい。

3. 修辞学的技法からみるアウグスティヌスの悲嘆経験

アウグスティヌスは、386年9月からカシキアクムで母モニカ¹⁸⁾や友人などの小グループで隠

17) ロラン・バルト著・沢崎浩平訳『旧修辞学便覧』、みすず書房、1979、30-31頁。

18) 『告白録』における母モニカ関連記事の要約は次の資料を参考にせよ（松崎一平『書物誕生—あたらしい古典入門：アウグスティヌスの『告白』—くわたりを語ること……』、岩波書店、2009、194頁）。

モニカという名前は息子アウグスティヌスの初期作品カシキアクムの対話篇『秩序』（1.2, 1.31, 2.1,

棲生活を始め、その後、387年4月にミラノで洗礼を受ける。そこから故郷北アフリカのタガステに向かっていく途中、アウグスティヌス一行はしばらくオスティアに滞在する。『告白録』第9巻にはこのオスティア滞在中にアウグスティヌスが母モニカとともに一瞬神的存在にふれるという特別な神秘体験をしたとある。この体験を通して二人はキリスト教のもっとも重要な教えである死者の「復活」に対する希望を固くもつようになる。この体験から数日後病床についた母モニカは息を引き取るのである。ここではアウグスティヌスの著作『告白録』第9巻に表われる母モニカの死と彼の悲嘆経験に関する記事を分析するが、上記のキケロの修辞学的技法の一部、すなわち小さなことを抑えられた文体で (*parva summis*)、普通のことを穏やかな文体で (*modica temperate*)、大きいことを力強い文体で (*magna graviter*) 語るという技法を適用することを試みる。この技法に即して彼の悲嘆経験の記事を読むと、そこにも小事、中事、大事といった三つの部分が現れるとともに、この三つが全体の話の中で混用されることによって彼の悲嘆が永生への希望へ昇華されていく過程がリズムカルでダイナミックな流れとして表れることがわかる。

『告白録』第9巻の悲嘆記事における小事、中事、大事の区分は、アウグスティヌスが自分の喪の作業においてどのような行為に重きを置き、どのような行為を避けようとしたのか、など当時キリスト教世界の信仰によって形成された彼自身の価値判断の基準に基づいて区分したものである。この三つの区分は以下の通りである。

- ①小事：小事とはアウグスティヌスの悲嘆経験において母とともに過ごしてきた日常生活が母の死によって引き裂かれてしまったことに対する悲しみ（第一悲嘆）について、そして、精神と心の力では抑えきれないその悲しみが信仰において好ましくない理由について冷静に分析し、抑えられた口調で淡々と述べられることである。小事の箇所においてアウグスティヌスは自分の悲嘆の感情を抑えている。
- ②大事：大事とはキリスト教の信仰にしたがって母（の救い）のために正しく悲しむこと（第二悲嘆）、つまり救いに与るのにふさわしい母であっても死後における母の生前の罪の問題や恐

2.2) に、中期作品『告白録』では第9巻12章37節でのみ表れるという。-icusとか-icaがつく名前は、北アフリカでは普通で、数多くのギリシャ移住者によって導入されたという(中沢宣夫『母モニカ』、新教出版社、昭和37、90頁の注50。)

このように、当時北アフリカには多くのギリシャ移民が来ていたこと、そして、モニカという名がギリシャ風の名であることからモニカの家族にはギリシャ人の血が流れ、母からアウグスティヌスはギリシャ人の理知を受けたものと想像できる(矢内原忠雄著『アウグスティヌス「告白」講義』、講談社学術文庫、1993、343-344頁の註2)。

モニカ(Monica, 331-387)は北アフリカのヌミディア地方にあるタガステという小さな町で当時社会的な地位のあるキリスト教信徒(4世紀初め頃に始まったドナティストの分裂に屈服しなかった信者)の両親の下で生まれる。彼女が長い時間一緒に過ごした祖母は殉教の時代を生き抜いた信者であるが、祖母から迫害時代の教会や殉教者(英雄)たちの信仰話を聞いて信仰を養うようになったのは疑いの余地がない。モニカの子アウグスティヌスがヒッポで説教したアフリカの殉教者たちの話は、キリスト教伝統を保護する活力となるよい証拠であるという。(Msgr. Leon Cristiani, *the story of Monica and her Son Augustine*, St. Paul Editions, 1977, pp. 17-20)。

ろしい神の裁きを意識し若干不安がりながら母の罪の赦しと救いのために神の前で沈黙の叫び声で熱烈に弁護することである。大事の箇所においてアウグスティヌスは自分の悲嘆を逆説的に母の永生への希望に昇華させながら力強く母の至福を求める（第二悲嘆）。

- ③中事：中事とは、抑えられるべき第一悲嘆や、神の前で正しく悲しむ第二悲嘆においても、愛情深く救いに与るにふさわしい母の信仰を称賛し、母を赦し永生を与える神の恩寵を称えていることである。この中事においてアウグスティヌスが穏やかに甘美に語る中、彼の悲嘆の感情は和らげられ、癒されるようになる。

【小事、中事、大事の箇所】

- ①小事：死の床についている母を見て悲しみ驚くが、悲嘆を強く抑える（9.11.27）。
- ②中事：彼女は、墓の問題は気にせず、主の祭壇で自分を記憶し続けてほしい、という遺言を残す（9.11.27）。
- ③中事：故郷の夫のお墓に入りたいという空しい考えをすてた彼女は、オスティアで神秘体験を通して持つようになった復活の信仰をもち、不安や恐れを乗り越えながら世を去る。アウグスティヌスは母モニカのそのような心境の変化を喜ぶ（9.11.28）。
- ④小事：モニカの死の直後、彼の悲嘆は精神の強い命令と心の声によって抑えられる（9.12.29）。
- ⑤中事：生前母モニカの偽りのない信仰生活から、彼女がみじめに死んだことでもなく、完全に死んだことでもないアウグスティヌスは確信する。そのため、彼は悲嘆や涙を母の弔いに相応しいものとしないう。9.12.29。
- ⑥小事：悲嘆を抑えている彼は心の中に苦痛を感じるが、その原因になるのは母との甘美な日常生活の習慣が終わってしまったことによる傷口である9.12.30。
- ⑦中事：母モニカの生前看病の際、アウグスティヌスは愛情深い彼女から聞いた褒め言葉に感謝の念を覚える9.12.30。
- ⑧小事：モニカの慰めを失ったことに傷つけられ、母との緊密な生が引き裂かれてしまったことに嘆く（9.12.30）。
- ⑨中事：周りの人々によって孫（＝アウグスティヌスの息子アデオダトゥス）の悲嘆が抑えられてから、エウォディウスが「詩編」をうたい、家中のすべての人はそれに和し、神の憐れみと裁きを讃える。弔問客の人たちがアウグスティヌスを一人にせず、慰める（9.12.31）。
- ⑩小事：家族と弔問客の間でも孤独に神を意識しながら自分の感情の弱さを反省するが、涙の流れは抑えきれない。（9.12.31）。
- ⑪小事：人間の運命の定めとしての悲しみは激しく感情を損なうが、この悲しみを別の悲しみによって悲しむ（二重の悲哀）（9.12.31）。
- ⑫小事：墓場で母の埋葬の際泣かず、終日重苦しい悲しみに身悶えし、神に癒しを求めるが、絆によって生じる悲しみは抑えられない（9.12.32）。
- ⑬中事：入浴と睡眠の後、疲れた悲嘆の心を癒やし救いを与える神を讃えるアンブロシウスの詩句を思い出す（9.12.32）。

- ⑭大事：母モニカの愛情と信仰を思いだし、神の前で抑えていた涙を放ち、その涙のうちに慰められる（9.12.33）。
- ⑮大事：（悲嘆の昇華）心の傷が癒やされ、別の種類の涙、すなわち死後の世界に悪影響を与えない母の罪に対する心配から出る涙を注ぐ（9.13.34）。
- ⑯中事：祈りの中で神を讃えるような人生を生きた母の信仰と善い行いについて語る（9.13.34）。
- ⑰大事：祈りにおいて洗礼以降モニカの罪の可能性を告白するとともに、地獄について言及しながらも罪を厳しく責めない神を信仰して彼女に天国の住処が与えられることを希望する（9.13.34）。
- ⑱大事：祈りにおいて霊的薬（イエスキリスト）を通した母の罪の赦しを数回切に乞い求める（9.13.35）。
- ⑲大事：祈りにおいて母モニカが他人の負い目を心からゆるしたことを神の前で弁護しながら、再び母の罪が許され、裁かれないうにいつそう強く求め、ひたすら神の憐れみに頼る（9.13.35）。
- ⑳中事：故郷のお墓に入ることを希望せず、イエスキリストの十字架の贖罪の恵みが死後も彼女自身に与えられるように祈りにおいて自分のことを記憶してほしいと求めた母モニカの遺言は、生前彼女がいつも（誰かのために）その贖罪の祭壇に仕えていたことの延長線として彼は認識する（9.13.36）。
- ㉑中事：聖書に証言されているように復活を通して悪魔に勝ったイエスキリストの贖いの恵みに母の魂が結び付けられていたことを祈りの中でアウグスティヌスは確信し、安心する（9.13.36）。
- ㉒中事：祈りにおいて自分の夫を信仰に導いた母モニカの行為を語る（9.13.37）。
- ㉓大事：最後にアウグスティヌスは自分の祈りに加えて、自分の本（『告白録』）を読む多くの読者たちがあゝ世へ去った自分の両親を覚えてくれるように、そして彼らの祈りを通して母モニカの遺言（主の贖罪の祭壇において彼女を記憶すること＝赦しと救いが与えられること）が豊かに実現されるように呼び掛けることによって、自分の悲嘆を永生への希望として昇華させる（9.13.37）。

4. アウグスティヌスにおける「喪の作業」の構造

4.1. 悲嘆のリズム：雄弁術によって吹き込められた基督教のメッセージ

前章でわれわれは、『告白録』第9巻におけるこの悲嘆記事を、小事、中事、大事という三つの部分に分けてみたが、その区分から次のように彼の喪の作業の正体が見えてくる。

- a. 第一悲嘆を抑える小事は7カ所、第一悲嘆や第二悲嘆の慰めとなる中事は10カ所、第一悲嘆を永生の希望へ昇華させる第二悲嘆に関わる大事は6カ所である。
- b. 前半部（主に『告白録』を書く前の過去の第一悲嘆①～⑭）においては小事と中事が混用され、後半部（主に『告白録』を書いている現在の第二悲嘆⑮～㉓）においては中事と大事が混用されることが分かる。

- c. 主に過去の第一悲嘆を回想する前半部を簡単に羅列すると、①小事②中事③中事④小事⑤中事⑥小事⑦中事⑧小事⑨中事⑩小事⑪小事⑫小事⑬中事⑭大事、となる。
- d. 主に現在の第二悲嘆について語る後半部を簡単に羅列すると、⑮大事⑯中事⑰大事⑱大事⑲大事⑳中事㉑中事㉒中事㉓大事
- e. 前半部と後半部の流れから悲嘆のリズムが見えてくる。つまり前半部においては第一悲嘆が抑えられたりやわらげられたりする小さなリズムが、後半部に入ると第一悲嘆がさらに癒されつつ第二悲嘆が噴出されて高まったり和らげられたりしていく大きなリズムが生じているということである。
- f. このように前半部の小さな波から後半部の大きな波へ発展していくというリズムは、雄弁術に長けていたアウグスティヌスの「表現の方法」であるに違いない。
- g. この術を駆使した背後には、アウグスティヌス自身だけでなく当時彼のキリスト教徒の仲間や『告白録』を読む読者も死の悲しみを乗り越え、永生への希望に生きるように勇気づけたい、そして母の遺言を実現するために読者たちにもとりなしの祈りをしてもらいたい、というキリスト教雄弁家の意図も潜んでいると考えられる。

4.2. 第一悲嘆：心の傷

上記の悲嘆のリズムの前半部を占める第一悲嘆は、以下のように理解されるものである。

①『告白録』第9巻に表れる第一悲嘆というのは、母の死そのものに対する悲しみではなく、母との生の習慣が引き裂かれてしまったことに対する悲しみである。この第一悲嘆は「母モニカが病気で倒れた時」、「母が息を引き取った直後」、「弔問客に慰められる中」、「お葬式の時」、「お葬式の後」といった五つの場面にわたって詳細に述べられている。

【母が病気で倒れた時】

「それから母は悲しみによって呆然としていた私たちを見つめながら『君たちのお母さんをここに葬っておくれ』と語りました。私は黙ったまま自分の悲嘆に馬勒をつけていました¹⁹⁾。」
(*deinde nos intuens maerore attonitos: «ponitis hic» inquit «matrem uestram». ego silebam et fletum frenabam.*) (9.11.27)

【母が息を引き取った直後】

19) 本研究で引用する『告白録』テキストは下記の山田晶訳にたよって私訳を試みたが、その際参考にした原文と翻訳は次の通りである。原文：‘*Confessiones*’ (BA14)。英訳：‘*Saint Augustine Confessions*’ (tr. by Vernon J. Bourke, “The Fathers of the church; a new translation” (v.21). The Catholic University of America Press, 1966.)；“*The Confessions of St. Augustine*” (tr. John K. Ryan, Image Books, 1960)；‘*The confessions*’ (tr. Edward Bouverie Pusey, “Great books of the Western World” (18), Encyclopædia Britannica, 1952.)；“*The Confessions of St. Augustine*” (tr. F.J. Sheed, Sheed & Ward, 1945)。和訳：『聖アウグスティヌス告白』(上, 下) (服部英次郎訳, 岩波書店, 2006)；『アウグスティヌス：告白』(山田晶訳, 中央公論社, 1990)；「告白録」(下) (宮谷宣史訳『アウグスティヌス著作集5-2』, 教文館, 2007)。その他：‘*Augustinus Die Bekenntnisse*’ (tr. by Hans Urs Von Balthasar, Johannes Verlag Einsiedeln, 1985)

「巨大な悲しみが私の横隔膜（胸）の中に押し寄せてきては涙とともに流れ出しました。その瞬間に、私の目は精神の冷酷な命令に促されて涙の源が乾くまで吸い込まれていましたが、そのような闘いで私はとても辛かったです。」(*confluebat in praecordia mea maestitudo ingens et transfluebat in lacrimas, ibidemque oculi mei uiolento animi imperio resorbebant fontem suum usque ad siccitatem, et in tali luctamine ualde mihi male erat.*) (9.12.29)

「…これと同じように、涙の中へ滑り落ちようとする私の中の子どもは私の中の若者の声によって抑えられ、黙っていました。あのお葬式が涙に満ちた嘆息や悲痛をもって執り行われることはふさわしくないと私たちは判断しました。…」(*hoc modo etiam meum quiddam puerile, quod labebatur in fletus, iuuenali uoce cordis, cohercebatur et tacebat. neque enim decere arbitramur funus illud questibus lacrimosis gemitibusque celebrare,*) (9.12.29)

「私の内側を重苦しく痛ませたものは何だったのでしょうか。それは一緒に作ってきた、とても甘めで親愛なる（信仰）生活の習慣から突然引き裂かれたことによる新しい傷以外に何でしょうか？」(*Quid erat ergo, quod intus mihi grauiter dolebat, nisi ex consuetudine simul uiuendi dulcissima et carissima repente dirupta uulnus recens?*) (9.12.30)

「…このように私は母の大きな慰めから見放されていたため、魂は傷つけられていました。私の生と彼女の生から成り立っていたものは引き裂かれるようになったのです。」(*quoniam itaque deserebar tam magno eius solacio, sauciabatur anima et quasi dilaniabatur uita, quae una facta erat ex mea et illius.*) (9.12.30)

【弔問客に慰められる中】

「私はあなたには知られている（拷問のような）苦しみをなだめていました。」(*mitigabam cruciatum tibi notum*) (9.12.31)。

「…あなたの耳もとで、…私自身の感情の軟弱さに対して怒鳴りつけ、悲しみの涙が流れないように抑えつけていたのです。しばらく涙は私（の抑制）に屈服していました。…私は心で抑えようとしているものが何なのか知っていました (*at ego in auribus tuis, …increpabam mollitiam affectus mei et constringebam fluxum maeroris, cedebatque mihi paululum: …ego sciebam quid corde premerem.*) (9.12.31)

「定められた秩序とわれわれの条件づけられた運命によって必然的に起きるこの人間的な力があれだけ猛烈に私を立腹させたので、別の悲しみでこの悲しみを悲しみ、このような二重の悲痛によって憔悴させられていたのです。(et quia mihi uehementer displicebat tantum in me posse haec humana, quae ordine debito et sorte conditionis nostrae accidere necesse est, alio dolore dolebam dolorem et duplici tristitia macerabar.) (9.12.31)

【お葬式の日】

「…（埋葬の時の）その祈りにおいても泣きませんでした。しかし、私は一日中ひそかに重苦しい悲嘆に暮れていました。そしてかき乱された精神で私はあなたが私の悲しみを癒してくれるようにできる限りのことをあなたに祈っていました。」(*nec in eis ergo precibus fleui, sed toto die grauiter in occulto maestus eram et mente turbata rogabam te, ut poteram, quo sanares dolorem*

meum,) (9.12.32)

【お葬式の後】

「(入浴した後)心から悲嘆の辛さは(汗のように体の外へ)流れ出ることはありませんでした。…(睡眠後)少なからず私の悲しみが和らいできたことに気付きました。(neque enim exudavit de corde meo maeroris amaritudo. …et non parua ex parte mitigatum inueni dolorem meum atque,) (9.12.32)

②上記の第一悲嘆の記事を読むと、アウグスティヌスが豊かな語彙を駆使して、自分の悲嘆がいかに苦しくつらいものなのか、そして、それをどれほど強く抑えようとしているのかがよく伝わってくる。引用した箇所から「悲嘆の辛さを指す言葉」と「悲嘆の抑制に関わる言葉」を整理してみると、彼の第一悲嘆の正体がよりはっきり見えてくるであろう。

【悲嘆の辛さを指す言葉】

- a. 動詞: desero (捨てる, 見捨てる), doleo (悲しむ, 苦しむ, 苦痛を起こす), dilanio (破る, 引き裂く), displiceo (不機嫌にする), fleo (泣く), macero (憔悴させる, やつれさせる), saucio (打ったり刺したりして) 傷つける)
- b. 形容詞 (過去分詞): lacrimosus (涙が出る, 涙が多い), maestus (悲しい, 悲嘆にくれる), turbatus (かき乱された), uiolenntus (過激な, 残忍な, 乱暴な)
- c. 名詞: amaritudo (苦さ, 辛さ), cruciatus (拷問), dolor (悲しみ), fletus (痛哭, 悲嘆), gemitus (嘆息, 恨嘆, 悲しみ), lacrima (涙), maeror (悲しみ, 悲哀, 哀悼), maestitudo (悲しみ, 悲嘆), questus (悲嘆, 悲痛), tristitia (悲しみ, 悲痛), uulnus (傷, 負傷)
- d. 副詞: grauiter (重く), uehementer (激烈に, 激しく),

【悲嘆の抑制に関する言葉】

- a. 動詞: coherceo (止める, 制限する, 制する), constringo (締める, 抑制する), freno (馬勒をつける, 制御する), increpo (叱る), resorbeo (もう一度呑み込む, もう一度吸い込む), premo (抑える, 圧迫をかける), sileo (黙る), taceo (黙る)
- b. 名詞: imperium ((魂の) 命令), luctamen (競争, 奮闘)

【まとめ】

- a. 数多くの語彙を用いた豊かな表現から、母との生と母との絆から引き裂かれることで彼がどれほど悲しみ苦しんでいたのかが窺える。
- b. 猛烈に押し寄せてくる波のような悲嘆と関連して、身体的苦痛や身体的制御を思わせるような言葉や表現が多数見受けられる。身体的苦痛を思わせるのは, doleo (苦しむ, 苦痛を起こす), dilanio (破る, 引き裂く), saucio ((打ったり刺したりして) 傷つける), uiolenntus (乱暴な), cruciatus (拷問), uulnus (傷, 負傷), 「悲しみが私の横隔膜 (胸) の中に押し寄せてくる」などである。身体的制御を思わせるのは, 「悲嘆に馬勒をつける」, 「私自身の感情の軟弱さに対して怒鳴りつけ」, 「(拷問のような) 苦しみをなだめる」, 「涙は私 (の抑制) に屈服する」などである。これら身体的表現の使用で悲嘆のリアリティは読者によりよく伝わっているのではなかろうか。

- c. アウグスティヌスの悲嘆抑制は、母モニカのようなキリスト者の死はほかの人たちの死とは異なるべきだというキリスト教的メッセージを反映するものである²⁰⁾。つまり彼は母の死を悲しむことがキリスト教の永生や復活の教理を否定するような形になることを恐れる当時の信徒たちの信仰（信徒の死＝勝利²¹⁾、信徒の死＝霊的死（完全な死）ではない²²⁾）にしたがって、自分の精神の力で冷静に悲嘆を制御しようと格闘したのである。しかし彼はその困難さを率直に述べている。この行為は母の死とその悲しみに対する彼の軽蔑、冷淡さ、鈍感さ、無関心、非人間性のように見えるかもしれない。
- d. 特に彼はこの第一悲嘆の感情を、別の種類の悲しみをもって悲しみ、それによって確実な悲嘆の制御を試みる。ところが、第一悲嘆を制御する手段として用いるこの別の種類の悲しみ、すなわち第二悲嘆の意味が明らかになることで、人為的な反応と思われる彼の悲嘆制御に対する誤解も解けるようになるであろう。

4.3. 第二悲嘆：別の悲しみ（別の種類の涙）

上記で言及したように、アウグスティヌスは、「別の悲しみで悲しみを悲しみ、このような二重の悲痛によって憔悴させられていました。(9.12.31)」と告白している。この別の悲しみの意味について彼は明確に説明しない。ところが、『告白録』の悲嘆記事の文脈からすると、この別の悲しみは、抑えられるべき第一悲嘆と異なるものとして、抑えなくてもいい悲しみ、むしろ積極的に行われるべき悲嘆であることがわかる。本研究では第一悲嘆と区分する意味でこれを第二悲嘆と呼ぶことにする。

この第二悲嘆の実態が最初に表れるのは、母の葬式のあと、疲れはてて悩む者の心を癒す神を讃えるアンブロシウスの詩句を吟味する中で、信仰深い母モニカの思い出にふけていたときである。「私はあなたの御前で、彼女について彼女のために、また自分について自分のために素直に泣くことができました。」(libuit flere in conspectu tuo de illa et pro illa, de me et pro me. 9.12.33)と祈る。そして、彼はそれまで抑えていた涙を放ち、願う存分涙を自分の心にまき散らす(ut effluerent quantum uellent, substernens eas cordi meo: 9.12.33)。

母と自分のために泣くというこの行為は、決して肉体的な死とその死別に対するものではない。母のために泣く自分の行為を罪とみなしそれを嘲笑するかもしれない人がいることを想定して、アウグスティヌスは神の目の前に自分の息子が生きられるように長年泣いてくれた母モニカ

20) J. J. O'Donnell, *Augustine :Confessions* (vol.III), Oxford:Clarendon Press, 2013, p. 140.

21) Msgr. Leon Cristiani, *the story of Monica and her Son Augustine*, St. Paul Editions, 1977, p. 165. 当時アウグスティヌスの母モニカの死は（信仰の意味での）勝利によく似るものだったが、このような死生観からもアウグスティヌスの悲嘆抑制を理解することができるであろう。

22) 山田晶訳「アウグスティヌス告白」（『世界の名著』14），中央公論新社，1968，319頁の注1。「ほんとうの死とは、神にそむいて罪のうちにとどまること、つまり靈魂の死である。義人は、たとえその靈魂が肉体からはなれても、復活の希望のうちに眠っているのであるから、完全に死んでしまったわけではない。それゆえ信者の死を悲しむべきではない（テサロニケ人への手紙第一4：13）。」

のために泣くことを非難しないように、そして、アウグスティヌス自身の罪のために神に向かって泣いてくれるように求める。(et si peccatum inuenerit, flevisse me matrem exigua parte horae, matrem oculis meis interim mortuam, quae me multos annos fleuerat, ut oculis tuis uiuerem, non inrideat, sed potius, si est grandi caritate, pro peccatis meis fleat ipse ad te, patrem omnium fratrum Christi tui. 9.12.33)

ここで非難されてはいけない泣く行為とは、死後の世界において神の前に生きられるように泣くこと、または神の前で生きることを妨げる罪のために悲しむことなのである。そのような意味であるため、アウグスティヌスは母の死によってもたらされた第一悲嘆がきっかけで、またはこの第一悲嘆に促されて死後の世界においても神の前で母が生きられるように、そして、あの世においても悪く影響するかもしれない母の生前の罪のために泣くことを積極的に評価するのである。これは第一悲嘆が第二悲嘆へ昇華されていることとして捉えてもよからう。

母の死(387年)から十年以上経って『告白録』(400年頃)を書いている現在、彼は母との生の習慣から引き裂かれたことによってできたあの心の傷、すなわち第一悲嘆がすでに癒されていると祈る(Ego autem iam sanato corde ab illo uulnere 9.13.34)。そして、神の婢女である母のために別の種類の涙を神の前で流そうとする(fundo tibi, deus noster, pro illa famula tua longe aliud lacrimarum genus, 9.13.34)。アウグスティヌスによると、別の種類の涙というのは、アダムの中で死んだすべての魂の危険²³⁾を認識することによって霊は激しく震えるようになるが、その霊から流れ出るものである(quod manat de concusso spiritu consideratione periculorum omnis animae, quae in Adam moritur. 9.13.34)。この別の種類の涙こそ、母の永生と罪の贖いのために泣くという第二悲嘆であり、第一悲嘆を抑制する手段だった上記の別の悲しみと同じような意味だと考えられる。この第二悲嘆の中で彼は亡き母のためにとりなしの祈りを捧げるのである。「…わが心の神よ、…いま私の母の罪のためにとりなしの祈りをあなたにささげます。私の声をお聞き入れてください…。母があなたの裁きにあわないように、主よ、母の負い目をおゆるしてください。おゆるしくくださることを切に願います。」(deus cordis mei, …nunc pro peccatis matris meae deprecor te; exaudi me… dimitte, domine, dimitte, obsecro, ne intres cum ea in iudicium. 9.13.35)。

生前モニカが遺言として残した言葉、『『あなたたちがどこにしようとも、主(イエスキリスト)の祭壇²⁴⁾のもとで私を思い出してほしい』』(《…ut ad domini altare memineritis mei, ubiubi fueritis.》9.11.27)において、「主の祭壇で私を思い出してほしい」というのは、聖餐式のときに亡くなった信者を思い出すことを意味する。死者のための祈りと彼らの記念のための供物は教会の古くからの伝統であるが、その祈りと供物から利益を得るために生きたモニカのこの遺言

23) 同上, 323頁の注3。山田晶氏はこの危険について次のように説明する。「母も、アダムの子孫である以上、少なくともこの世の生においては、受洗以降といえども、罪の危険をまねがれていない。」

24) Carl G. Vaught, *Encounters with God in Augustine's Confessions: Books VII-IX*, State University of New York Press, 2004, p.137. 祭壇とは、神が彼女の罪が贖われるところ、生命の本(the Book of Life)の中に彼女の名が記されるところであるが、この祭壇で神は原罪(善悪の知識の木の実を食べたこと)に対する刑罰を廃棄し、彼女が命の木に近づけるように許すという。

は²⁵⁾、まさしく、彼女のために別の種類の涙を流し、別の悲しみをもって祈ってくれることを願うことにほかならない。『告白録』の自伝的部分が終わるとともに悲嘆記事が締めくくられる結論のところで、アウグスティヌスはそのように母の遺言を読者たちにもう一度喚起させ、自分の悲嘆記事の意義を強調する。つまり、『告白録』を読むすべての読者に向って、信仰をもって亡くなった母モニカのみならず、父パトリキウスをも主の祭壇のもとで覚えてくれるように (ut quotquot haec legerint, meminerint ad altare tuum Monnicae, famulae tuae, cum Patricio, 9.13.37), そして、母のあの遺言の願いが『告白録』を読む多くの読者の祈りの中で彼女により豊かに叶えられるように (ut quod a me illa poposcit extremum uberius ei praestetur in multorum orationibus per confessiones quam per orationes meas. 9.13.37), 強く呼び掛けているのである。これが母モニカの涙によってはじまり、母の死によって終わる『告白録』の自伝的な部分の目的であり、結びの言葉でもあると言われている²⁶⁾。

第一悲嘆を制御する手段としての別の悲しみ、別の種類の涙、そして主の祭壇で母を思い出すことの意味について論じてきたが、実はこれらはオリゲネスからアンブロシウスへ受け継がれ、アウグスティヌスにも影響を及ぼしたとされる原初的煉獄思想²⁷⁾ に関わるのではなかろうか。ジャック・ル・ゴッフによると、アウグスティヌスはとりなしの祈りと浄罪の火の関係を明らかにするようなことは彼の著書のどこにも書いていないが、モニカのためのとりなしの祈りのテキスト(『告白録』9.13.34～37)では罪人ながら救済に値する死者への弁護(死者のためのとりなし)

25) G. クラーク著・松崎一平の他訳『アウグスティヌスの母モニカ』, 教文館, 2019, 197頁。「主の祭壇で私を思い出してほしい」というのは、聖餐式のときに亡くなった信者を思い出すことを意味し、死者のための祈りと彼らの記念のための供物は、教会の古くからの伝統だという。

26) 加藤信朗『アウグスティヌス『告白録』講義』, 知泉書館, 2006, 241-252, 258頁。

27) ジャック・ル・ゴッフ著・渡辺香根夫・内田洋訳『煉獄の誕生』, 法政大学出版局, 1988, 80-98, 587頁の注25。煉獄の教義の創設者はギリシア人の二人の神学者、アレキサンドリアのクレメンス(215年以前に没)とオリゲネス(253年もしくは254年没)と知られている(80-81)。オリゲネスの場合、コリント人への第一の手紙3章10～15節のパウロの隠喩を用いて、義人が死後真の喜びの天国にたどり着くまで最後の審判と火の試練(短期と長期の試練)を経るといい、来世における死後の浄化(浄化の火)という明確な観念を表明する(87-88)。ボワティエのヒラリウス(367年没)、アンブロシウス(397年没)、ヒエロニムス(419年または420年没)は、死後の運命についてオリゲネスに連なる考え方をしているが、特にアンブロシウスは、天国に帰ろうと望む者はみな、この火の試練に耐えなければならない、イエスや使徒や聖人たちでさえ、火を通過してはじめて天国に入ったと言明する。三種類の火があって純銀の義人が経験する火は一種の清涼剤のようなもので、鉛の無信仰者や背教者、瀆聖者が経験する火は責め苦となる。そして銀と鉛の混じり合った罪人が経験するのは浄化の火でその罪科の重さに応じて火がもたらす苦痛も長引くという。アンブロシウスにおいて故人のための生者の祈りの有効性、つまり責め苦の軽減を求めるとりなしの祈りの価値は肯定された(90-92)。アンブロシウスの影響を受けたアウグスティヌスは煉獄の真の父と知られているが、彼自身の著書の中には次のように原初的煉獄に関わる箇所が表れる。poenae purgatoriae(罪を償う罰、『神の国』21.13および16), tormenta purgatoria(浄罪の苦しみ、『神の国』21.16), ignis purgationis(罪障消滅の火、『マニ教徒に反駁して創世記注解』2.20.30), ignis emendatrius(矯正の火、『詩篇注解』37.3)(95-98頁, 587頁の注25)。

の有効性や、洗礼と善き行いといった死者の功徳を肯定しており、煉獄思想の根拠として用いられているという。これには、天国のみならずせめて煉獄へ行くためにも神の慈悲と生者のとりなしの祈りが有利に働くという意味が含まれているという²⁸⁾。信仰によって救い(天国)に値するにもかかわらず、生前アダムの原罪のもとで犯したかもしれない罪の危険性に対して別の種類の涙を流すことの背後には、そしてモニカが残した遺言、つまり『告白録』の読者に強く求めた「主の祭壇で母モニカを思い出すこと」の背後には、古代キリスト教世界で信仰されていた「浄化の火」(煉獄につながるもの)というものがあると考えられる。

モニカは救い(天国)が保証されているとしてもこの浄化の火を通ることを念頭においたため、息子にそのような遺言を遺し、アウグスティヌスは母の救いには少しも疑いがないにしても天国に入るために浄化の火を通らなければならない母のことを神の慈悲に委ねながら涙を流したのであろう。この涙こそが、別の種類の涙であり、第一悲嘆を制御する別の悲しみ(第二悲嘆)を指すものだと推測されるのである。

この涙は、引き裂かれる生(死別)ではなく、神の愛によって結ばれる真の内的共同体に向けられている。このような共同体は彼の内的生活によって成り立っている。『告白録』にはアウグスティヌスの内的生活が書き記されており、この内的生活は母モニカによって支配されている²⁹⁾。母によって支配されるこの内的生活というのは、アウグスティヌスが母を通して神への愛と信仰の旅を学び、魂において彼女と強く結ばれた³⁰⁾ことを意味する。とくにモニカの死の数日前にオスティアで経験をした一種の神秘的な観想を通して親子という人間的な関係を超えた世界を直視するようになるアウグスティヌス³¹⁾にとって、真の共同体、魂と魂との真の共生は、この地上的な慣習や取り決を超えたところに実現される。母モニカのための祈りは、このような真の共同体に関する基本的な理念を暗示するものであり、この祈りにおいて、カトリック教会を神の愛による隣人愛に基礎づけられた真の共同体へ導こうとしている神の救済の計画が示されている³²⁾という見方は当を得ているであろう。したがって、アウグスティヌスの別の種類の涙(第二悲嘆)は、永生への希望と切り離されない真の共同体の実現に向けられているものとして理解しなければならない。こうして永生への願望を土台とする第二悲嘆の逆説は、「希望のある悲しみ」、「癒された悲しみ」という意味合いをもつ宗教的な力として評価されるかもしれない。

28) 同上, 98-101頁。

29) P. Brown, *Augustine of Hippo: A Biography* (A New Edition with an Epilogue), University of California Press, 2000, p.17.

30) 池田敏雄訳『告白録—抄訳と解説』, ニュヴァーサル文庫, 1966, 168頁の注。

31) 服部英次郎・藤本英三著『アウグスティヌス告白』, 有斐閣新書, 1980, 162-164頁。

32) 同上, 167-168頁。

5. アウグスティヌスの喪の仕事についての現代的考察

5.1. キリスト教の伝統的な死生観の課題

あの世での永生や復活の信仰をもっていた母モニカは、「死の良さ、生の蔑視について」(de contemptu uitae huius et bono mortis 9.11.28) 語ったことがある。これは息子のアウグスティヌスにも共有されていたものとして、信徒の死は霊的な死(完全な死)ではなく勝利のようなものだという来世観を表している。われわれはこのような来世観から、善人における死の幸福³³⁾と死後の希望³⁴⁾と悲嘆抑制の理由³⁵⁾について語るあのソクラテスの言葉や、死の祝祭を謳うインディアンの歌³⁶⁾を思い出すかもしれない。魂の不死と死後の世界を前提とするこのような死生観は、現代的な死の捉え方、例えば細胞の死と遺伝子の永続による生の意味³⁷⁾や、生命の時間的な有限性(死)であるからこそ意味のある生命³⁸⁾、あるいは自然の一部に帰還する死の運命にもかかわらず愛する者の中では愛の思い出として存在し続ける生³⁹⁾や、機械に過ぎない人間には魂も不死

33) ソクラテス著・久保勉訳『ソクラテスの弁明』, 岩波文庫, 2013, 67頁。ソクラテスはこの世からあの世への遍歴の一種である死より大いなる幸福があり得ないという。

34) ソクラテス著・岩田靖夫訳『パイドン』, 岩波文庫, 2013, 28頁。ソクラテスによると、哲学の中で生きる人間は、死に臨んで恐れを抱くことなく、死んだ後にあの世で最大の善を得るだろうという希望に燃えるという。

35) 同上, 175頁。ソクラテスは自分が毒薬を飲んだ後、悲嘆の感情を表す彼の友人と弟子たちに対して、「人は静寂のうちに死ななければならない」という理由をあげて悲嘆抑制を要請する。

36) ナンシー・ウッド著『今日は死ぬのにもってこいの日』(Many Winters), 1998, 117, 66頁。この書は先住アメリカ人プエブロ族のインディアンの口承詩の伝統をまとめたものである。ここで語られる死は次の箇所にも表れるように「再生」「甦り」を意味する冬のようなものである。「春が冬に始まり、死が誕生によって始まる…。」(18頁)、「自然は何ものとも戦おうとしません。死がやって来ると、喜びがあるのです。年老いた者の死とともに、生の新しい円環が始まります。だからすべてのレベルでの祝祭があるわけです。」(66頁)

37) 田沼靖一「死の遺伝子からみた未来」『死生学③—ライフサイクルと死』(武川正吾・西平直編), 東京大学出版会, 2008, 197-217頁。毎日行われる再生系細胞の死(「アポトーシス」Apoptosis)と生命の寿命が来たことを表す非再生系細胞の死(「アポビオーシス」Apobiosis)という「遺伝子に支配される二重の死のプログラム」によってそれぞれ個体の中で生命が維持され、その個体を通して時空を超えて次の世代へ遺伝子が移り住み、存在し続けるという意味での生の永続である。

38) V. E. フランクル著・霜山徳爾訳『死と愛—【新版】ロゴセラピー入門』, みずず書房, 2019, 70-71, 74-75, 79-82頁。死は人間の生命の時間的な有限性である。このような有限性は個人の唯一性と状況の一回性の中で明らかになるものである。唯一性と一回性は各個人に社会的な責任を与える。そのような意味で唯一性と一回性は実存の意味において決定的な意味をもつ、それゆえ生命の時間的な有限性としての死は生命を有意味にする。このような考え方は生殖による永遠化、子孫を遺すことによる生命の意味を否定する。

39) ミッチ・アルボム著・別宮貞徳訳『モリー先生との火曜日』, 2014, 175-176, 180-181頁。

も存在しないため死の恐怖を抱くことも生の長さに執着することもいらない人生⁴⁰⁾ などとは、明らかに異なるものである。なぜならこれらの死生観は、宗教が示すような不死や死後の世界を語らないまたは否定するように見えるからであろう。アウグスティヌスの悲嘆から見えてくる死生観は罪に対する悲嘆を永生の希望へ昇華させるキリスト教の枠の中では強力なパストラルケア⁴¹⁾の根拠を提供するに違いない。しかし、宗教の教理という枠に縛られない「スピリチュアルな思考⁴²⁾」「しなやかな思考⁴³⁾」から程遠いかもしれない。それゆえ従来のキリスト教的死生観ではキリスト教を超えて新たな関係を結ぶことには限界があるように見える。さらに、アウグスティヌスの第二悲嘆における死者のためのとりなしの祈りは、亡くなった非キリスト者に対しては該当しないため、もし自分の愛する者が信仰をもたず亡くなった場合、その信徒は愛する者の死そのものより、煉獄の厳しい浄化の火を通ったり地獄に入ることにに対する悲しみのほうが、より耐え難い苦痛になる場合もある。まさにこの苦痛はキェルケゴールがいう「死に至る病⁴⁴⁾」、すなわちキリスト教的意味の死として肉体的な死ではなく永遠に死ぬという意味での絶望を反映するのである。宗教改革以降カトリック教会を除けば、プロテスタント諸派では基本的にキリスト者であれ非キリスト者であれ死者のためのとりなしの祈りそのものが否定されている。こういう背景からも言えるように愛する者（非キリスト教徒）を喪失した悲しみについては従来のパストラルケアは機能しなかったのではなからうか。キリスト教は「しなやかな思考」をもってより真摯にこのような問題と向き合う必要があるであろう。

5.2. アウグスティヌスの喪の作業からみえるグリーフケアの意義

他方、アウグスティヌスの悲嘆から窺えるキリスト教の伝統的な死生観の限界にもかかわらず、彼の喪の作業にはグリーフケアにおいて三つの意義があると考ええる。

第一、悲嘆の身体的表現の意義である。アウグスティヌスは、母の死によって、多様な語彙と様々な表現で自身の悲嘆感情を表している。この悲嘆は、二人称の死体⁴⁵⁾に対するものではなくかけがえのない二人称の死によって甘美な生活習慣から別離することで経験するもの（第一悲嘆）である。そして、対象喪失による悲しみは、「その愛を失ったために私たちの一部もいっしょに死んでしまった⁴⁶⁾」ようなものなのかもしれない。この悲しみは、強い宗教的な悲嘆抑制にも

40) シェリー・ケーガン著・柴田祐之訳『「死」とは何か: イェール大学で23年連続の人気講義』(完全翻訳版), 文藝社, 2019, 726-728頁。

41) John T. McNeil, *A history of the cure of souls*, New York : Harper and Bros., 1951, pp. 94-96, 105-108. アウグスティヌス前後の2-5世紀においてパストラルケアというのは、信徒が教会や修道院といった信仰共同体の中で自分の罪を懺悔し告白するように魂の医者(教会指導者)によって行われる行為である。

42) 窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』三輪書店, 2004, 7-11, 63-66頁。

43) 窪寺俊之『スピリチュアル研究-基礎の構築から実践へ』, 聖学院大学出版社, 2019, 15-17, 37頁。

44) キェルケゴール著・斎藤信治訳『死に至る病』, 岩波文庫, 2010, 31-33頁。

45) 養老孟子, 『死の壁』, 新潮新書, 2004, 76-85頁。一人称の死体(ない死体), 二人称の死体(死体でない死体), 三人称の死体(死体である死体)についてはこの箇所を参考にせよ。

46) キャサリン・M・サンダース著・白根美保子訳『死別の悲しみを癒すアドバイスブック』, 筑摩書房,

かかわらずはみ出てしまうような痛みとして、そして、すでに述べたように、激しい身体的苦痛や強力な身体的制御を思わせるような言葉や表現で詳しく描写される。それによって悲嘆のリアリティが宗教的な事柄によって遮られることなくはっきりとその姿を現す。アウグスティヌスにおける悲嘆の身体的表現において抑えがたい苦痛とそれを強引に押さえつける制御との対立関係は、悲嘆と病症（および悲嘆反応）の因果関係⁴⁷⁾や悲嘆と死の因果関係⁴⁸⁾など、悲嘆が体に及ぼす様々な悪影響に関する研究に少しでも参考になるソースを提供していると考えられる。例えば「(母の目を閉じてから) 心臓のすぐ下の方にある横隔膜（ラテン語 *praecordia*, 英語 *diaphragm*）にまで巨大な悲しみが押し寄せてきては涙とともに流れ出した (9.12.29)」というアウグスティヌスの表現は、ブロークン・ハート (*broken heart*) と呼ばれる悲嘆の心や悲嘆による心臓病の死因⁴⁹⁾の説明に参考になるのではないだろうか。

第二、キリスト教のパストラルケアのような宗教的ケアの肯定的側面の意義である。二人称の死による甘美な生活習慣から引き裂かれることによって生じる耐え難い身体的苦痛のようなものとして押し寄せてくるアウグスティヌスの第一悲嘆は、神の前で永遠に生きられるように生前あったかもしれない母の罪を悲しみ、泣く別の悲しみという第二悲嘆に抑えられ、希望へと昇華される。この悲嘆の制御行為はすでに論じたように、彼の冷淡な態度や人間味のないものとして現れているのではない。むしろ、神の愛を信仰する真の内的共同体の中で時空をこえた別の次元で親子の絆を高めようとする身悶えなのである。ところが、それは宗教的な経験において言葉では説明できない平安や喜びをもたらす場合も確かにある。キリスト教の伝統的なパストラルケアのようなものにおいて排他的な態度や「しなやかな思考」の欠如は解決すべき課題ではあるが、その枠の中では死別による傷を愛する者との消えない永続的な絆へ高め、生をより豊かにする側

2000, 47頁。

- 47) ロバート・A. ニーメヤー著・鈴木順子訳『〈大切なもの〉を失ったあなたに一喪失をのりこえるガイド』, 春秋社, 2012, 20頁の訳者注〈4〉, 15, 126-128頁。この書では、グリーフが一定方向に向かって一直線に進行し、段階的に回復し向かうとする悲嘆反応の「段階理論」が、一連の心理的な変化に関する実証的証拠を欠いているという理由で、否定するという見解が示される。その代りに喪の過程が喪失の意味づけ、人生の意味・生きがいの再構成のような「意味再構成」のプロセスであるという最先端のグリーフ理論が紹介される。参考までに、「段階理論」に関する基本的な資料は次のとおりである。12段階説（アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか（新版）』, NHK出版, 2014, 31-38頁）, 5段階説（エリザベス・キューブラー・ロス&デーヴィッド・ケスラ著・上野圭一訳『永遠の別れ』, 日本教文社, 2013, 28-62頁。）
- 48) アルフォンス・デーケン著「悲嘆のプロセス—苦しみを通しての人格成長」『生と死を考える』（曾野愛子, A. デーケン編）, 春秋社, 2002, 63-67頁。悲嘆と死の因果関係に関する研究はこの箇所にも簡略に紹介されている。悲嘆と病症に関しては次のような資料を参考にせよ。柏木哲夫『死にざまこそ人生』朝日新聞出版, 2011, 179-195頁。
- 49) 小此木啓吾, 前掲書, 5-6頁。対象を失った悲嘆などさまざまな感情の高まりが、もっとも直接的に感情生活の影響を受ける器官としての心臓や血圧に影響を及ぼし、血液の科学的組成を変えて心臓病を誘発する可能性もあるという。

面も存在する。その良さを宗教の枠の外へ広げ、受け身的な「悼む営み (mourning)」から世界を学びなおす能動的な「悲しむ営み (grieving)⁵⁰⁾」へ成熟させるのは、宗教の社会的課題で時代的要請であろう。その具体的な方法はあるのであろうか。非キリスト教徒の死者のための祈り⁵¹⁾はこの問いに対する一つの答えを提供するきっかけになるかもしれない。さらには、グリーフケアが求められている現代社会において、「悲嘆をともにする」、「ともに悲嘆を生きる」文化⁵²⁾や、死別による悲しみに対する社会的な冷淡さによって生じる諸現象（適応不良の神経症的反応）を乗り越え、宗教的信念をもたない大多数の人々も受け入れられる宗教的儀式⁵³⁾を新たに構築していくことも世界を学びなおす「悲しむ営み」を広げる方法になるであろう。こうしたところにグリーフケアにおける宗教的アプローチの意義が見出されると考えられる。

第三、ナラティヴの効果の意義である。10年以上前の死別の悲しみを振り返るアウグスティヌスの『告白録』第9巻の悲嘆記事を、小事（第一悲嘆の抑制）、中事（悲嘆を和らげる信仰的事柄）、大事（第二悲嘆の仕事）という三つの部分に分けると、前半部（主に第一悲嘆①～⑭）においては小事と中事が混用され、後半部（主に第二悲嘆⑮～⑳）においては中事と大事が混用されることが明らかになった。つまり前半部においては第一悲嘆が理性の力で抑制されたり信仰の事柄でやわらげられたりする小さなリズムが、後半部にいたっては第二悲嘆が涙とともに高揚したり信仰の事柄で和らげられたりしていく大きなリズムが生じていることが分かったのである。前半部の小さな波から後半部の大きな波へ高まっていくそのようなリズムは、アウグスティヌスの雄弁術が駆使されたナラティヴの特徴であると考えられる。語り手の彼が母モニカの遺言の実現という意図をもって聴き手の心に時間の中で起きた悲嘆の出来事を語るこのナラティヴは、まず彼自身の喪失の悲しみから立ち直るようにする癒しの手段⁵⁴⁾であるとともに、今日に至るまで古代最高の自伝文学として評価される『告白録』の読者にも大きな感動を与えてきた。このナラティヴにおいて特に注目すべき点は、アウグスティヌスが人間固有の特徴である喪失の悲

50) トーマス・アティック著・林大訳『死別の悲しみに向きあう』、大月書店、1998、9頁。「悲しむ営み」は、「悼む営み」がめざすべき目標のようなものとして、世界を学びなおす営みである。ここで学びなおすということは、私たちの生活のあらゆる面で一度に自分のすべてを投入して、この世界でいかに自分自身であるべきかを学ぶことである。そのような学びをとおして、自分のさまざまな感情に耐えて生きるすべを見つけ、喪失の生活のなかで自信、自尊心、アイデンティティを確立しなおそうと苦闘するようになる（16頁）。そして、世界を学びなおすなかで、能動的に効果的に悲しむことによって、自分が気づかった人のことを激しい苦痛・苦悶なしに思い出し、思い出を大切にすることができるといふ（71頁）。

51) オリエンズ宗教研究所『キリスト教葬儀のこころ』、オリエンズ宗教研究所、2010、204-205頁。カトリック教会のようにキリスト教の信仰に基づくビジョン、すなわち神のもとでの永遠のいのち（復活）のビジョンをもってキリスト者でない死者のためにも祈ることを認める場合があるという。

52) 島蘭進、前掲書、70、244-245頁。日本におけるグリーフケアのための宗教文化の再活用に関してはこの書の第2章と8章を参考にせよ。

53) G. ゴーラー著、前掲書、181-182頁。

54) ロバート・A・ニーマイヤー著・富田拓郎・菊池安希子訳『喪失と悲嘆の心理療法』、2007、215頁。喪失のナラティヴの効果に関してこの資料の213-225頁を参考にせよ。

しみを文学的に昇華させている⁵⁵⁾だけでなく、その文学作品を通して母を弔っている⁵⁶⁾というところである。このような意味をもつ『告白録』のナラティブは、「意味再構成」を目指すグリーフ演習⁵⁷⁾や、人生のリ・メンバリング (remembering)⁵⁸⁾の方法などグリーフケアのナラティブ・アプローチにおいて示唆に富んでいるかもしれない。

6. おわりに

以上、われわれは、アウグスティヌスの『告白録』第9巻に記されている彼の悲嘆経験について考察した。母の死による悲しみを執拗に抑えようとする彼の姿が、果たして従来の研究者たちが語るように、冷淡で人間味のないようなものに過ぎないのか、という問いをもって、キケロの雄弁術の応用をてがかりに彼の悲嘆記事の分析を試みた。そしてこの分析から、当時キリスト教を代表するこの古代人の喪の仕事が、現代のグリーフケアにおいてどのような意義を持つかについて論じてみた。アウグスティヌスの悲嘆から見えてくる死別による悲しみに対する伝統的なキリスト教的ケアはその教理にとどまっている限り今日の社会では排他的で、「しなやかな思考」の欠けたイメージを払拭できないであろう。しかし、このような問題を抱えているにもかかわらず、古代人の文学作品から引き出される、悲嘆の身体的表現、宗教的ケアの肯定的側面、そして、ナラティブの効果といったいくつかの意義は、現代的グリーフケアに参考になる視点を提供すると考える。

55) バーバラ・J・キング著・秋山勝訳『死を悼む動物たち』、草思社文庫、2018、312、328頁。バーバラ・J・キングは、次のように悲嘆の思い（喪失の悲しみ）を芸術へ昇華する人間固有の特徴について強調する。「すべての種のなかでも、ひとり人間だけが死に伴う悲しみを芸術というかたちに向けていくことができるのは、人が回想録を書いていることから明らかだ。…人間は言葉で悲しみを表すものだが…。」

56) 竹内整一「死の臨床と死生観」『死生学（1）：死生学とは何か』（島菌進・竹内整一編）、東京大学出版社、2106、254-255頁。竹内整一氏は、「弔う」ことを死者の世界を「訪う」こと、そして、死者の思いを「問う」こと、さらにそれをまとめて「物語」へと作り上げることとして理解する。

57) ロバート・A・ニーマイアー著、前掲書、第3章を参考にせよ。

58) 水野治太郎・生田かおる著『ナラティブ・アプローチによるグリーフケアの理論と実際』、金子書房、2017、91-92頁。ナラティブによるグリーフケアにおいてリ・メンバリングは、造語として「過去にもう一度向き合う」、「過ぎ去った人生を振り返る」の意味であり、その意味には「思い出す」(remember)と、仲間または会員の“member”という二つの要素がある。